



幼き日の悔しさを胸に、 「分限者」を目指し 激動の時代を生き抜く

おくの つね お
奥野 恒夫 (1920~1990年)



■大和合成 株式会社

本社所在地：堺市北区東三国ヶ丘町5-1-10 従業員数：25名（グループ含む1,269名） 資本金：2,400万円
創業：1939（昭和14）年11月3日
事業内容：各種合成樹脂成形品の製造並びに販売

幼心に宿る決意

恒夫が生まれたのは、岡山県英田郡西粟倉村という、兵庫県と鳥取県の県境に程近い田舎の村だった。恒夫が3歳になった頃、母・フサがこの世を去ったため、父・荒吉は男手ひとつで恒夫ら3人の子どもを育てたが、生活は苦しかった。自然に囲まれ、のびのびと楽しい幼少期ではあったが、家が貧乏だということに悔しい思いも多かった。特に運動会で目にした光景に、小学一年生の恒夫は大きな衝撃を受けた。お昼時になると、同級生たちは家族と一緒に巻き寿司やゆでたまごといったごちそうを食べていたのだ。一方で恒夫は、父がいつもどおり作った麦混じりのおにぎりだけ。「学校を出たら一生懸命働いて、分限者^{※1}になって父を楽にしてやる！そして巻き寿司を腹いっぱい食べてやる！」と心に誓ったという。

父の反対を押し切って小学校の高等科（現在の小学校高学年から中学校に相当）に進学した恒夫は、よりいっそう思いを強くして勉学に励んだ。放課後は野良仕事を手伝い、日曜は土木作業で日銭を稼ぐという厳しい生活の中であったが、恒夫は皆勤賞で高等科を卒業した。



恒夫の生家

カバン、教科書、自転車…
学校で目にする同級生たちの新品の持ち物は、お古ばかり持たされた恒夫に、深い悔しさと野心を与えた。

※1「分限者（ぶんげんしゃ/ぶんげんしゃ）」とは、「身分が高い人」、「資産家」といった意味で、地方における出世の一つの目標であった。

時代に翻弄される少年の明日

しかし、卒業の年である1935（昭和10）年、度重なる経済恐慌に見舞われた日本は不況の真っ只中にあり、恒夫の就職先は思う様に決まらなかった。

14歳になった恒夫が、ようやく斡旋してもらえた最初の働き口は大阪・放出の米屋だった。しかし、ここでの仕事は早朝から深夜まで配達や雑用を命ぜられるうえ、稼ぎは食事付きという理由で小遣い程度しかなかった。その頃、恒夫は「せめて中学（現在の高校に相当）卒の資格をとりたい。自分の稼ぎで、自分の生活の中で勉強して、生きていく上での実力をつけたい」と考えていた。満足な時間もとれず、故郷の父に仕送りもできないような環境に、恒夫は早々に見切りをつけた。働きはじめて1ヶ月も経たないうちであった。

2つ目の職場はラス工場であった。ラスとは、壁の下地用建材の鉄板の網である。この工場での仕事は、鉄板を網状に打ち抜いて、その切削部分が錆びないようにコールタールに浸けて保護をするというものであった。鉄板を担いで身をかかめ、コールタールの入った大きな壺の中に浸けるのだが、体力に自信があったとはいえ、まだ14歳の恒夫には堪える重さだった。しかも、屈強な先輩たちは「おい小僧！そんなもん1枚ずつやるやつがあるか！5・6枚いっぺんに漬ける」とどやしつける。なんとか無理をして仕事を続けていた恒夫だったが、ある時、担ぎ上げたはずみでコールタールの壺へ落ちてしまった。入社して1週間ほどの出来事だった。「ここで働き続けたら、いつか取り返しのつかないことになる。俺はやはり学問を裏づけにして出世したい」。恒夫は、この事故がきっかけで再び職を変えることとなった。

生涯を捧げた天職との出会い

3 つ目となる恒夫の仕事が、その後の人生を左右することとなるベークライトの成形工場、大同ライト製作所であった。決して楽な仕事ではなかったが、そこで恒夫は人一倍働いた。その働きぶりが認められ、稼ぎは同僚よりも多く、おかげで父に収入の半分以上を仕送りすることができるようになった。

しかし、恒夫が大同ライト製作所に入社して3年が経った1938(昭和13)年、経営難から同社は倒産。それに伴い経営者が変わり、社名も不動ライト工業所となった。当時、周囲から若者がぼつぼつと徴兵されるようになってきており、自分もきつと2・3年のうちに戦争に行くことになるだろうと考えた恒夫は、「自分たち若者は遅かれ早かれ戦争に行つて死ぬのだから、それまでは気楽にやろう」と考え、会社の事情もあって退職する運びとなった。その後、徴兵までの腰掛けのような気持ちで郵便配達の仕事を行っていた恒夫だったが、ある時、大同ライト製作所時代の同僚から、当時の上司が独立してベークライトの会社をつくるらしいという情報を入手した。その人物とは、かつて大同ライト製作所で工場長を務めていた奥野吾郎氏であった。

1939(昭和14)年11月、大同ライト製作所の倒産から一年で、奥野氏は奥野製作所を立ち上げていた。仕事の内容は主に下請けで、受託生産していた製品は、押しボタンスイッチの電気絶縁部品であった。噂を耳にした恒夫は奥野氏を訪ね、奥野製作所で働かせてもらえることとなった。しかし、時代は日中戦争の只中、恒夫にも徴兵検査が目前に迫っていた。



姫路での訓練時代

恒夫は、その優秀さを見込まれたためか、同期の中で最も早く北満州のチチハルの部隊への転属を命ぜられ、航空技術下士官要員として現地へ派遣された。

嵐のような戦場を生き抜いて

奥野製作所入社翌年の徴兵検査を受けた恒夫は、さらにその翌年、1941(昭和16)年3月に姫路の野砲隊に入隊した。その後、北満州のチチハル、フィリピンのマニラ、オランダ領ボルネオ島など転戦を繰り返すうち、所属する部隊の人員は次々と傷つき倒れ、敵の攻撃も激しさを増していった。それでも恒夫たちは疲労困憊の体にムチ打つようにして、特攻機の整備や飛行場の修理などに励んだ。

ボルネオのジャングルの中を進む恒夫の部隊では、同僚たちが猛暑や赤痢、栄養失調で次々と命を落としていく。恒夫も崩れ落ちそうになりながら、なんとかジャングルを抜けた。しかし、そこに待っていたのは敵国・オーストラリア軍だった。半死半生の恒夫らに戦闘する体力などなく、言われるまま無条件降伏し捕虜となった。恒夫は死んだ戦友のためにも、厳しい捕虜生活に耐えて、生きて日本に帰ることを胸に誓った。

ボルネオで日本の敗戦を知らされた恒夫は、終戦の翌年4月に日本へ帰還することとなった。

1946(昭和21)年10月、実家で静養し、栄養失調から回復した恒夫は大阪・堺へと移った。目的地は奥野製作所だった。戦火により変わり果てた大阪で奥野氏と再会を果たした恒夫は、涙ながらに戦争中の出来事を語り合い、再び奥野氏の下で働くことを決めた。戦前と比べ工場は大きくなっていったが、混乱も大きく従業員は減り疲弊しきっていた。そんな中でも懸命に経営を続ける奥野氏の背中を見ながら、恒夫は「この人のように、もっと偉くなろう。会社も大きくしなければ、あの頃食べられず悔しい思いをした巻き寿司もゆでたまごにも手が届かない」と、この会社に尽くす覚悟を新たにされた。決して表には出さなかったが、働き者で勤勉な恒夫に、奥野氏は好感を持っていた。また恒夫も、自分と同じように貧しい幼少期を過ごしながらも、独力で専門学校まで卒業した奥野氏を心から尊敬するようになっていた。

その後、恒夫は奥野氏の長女・佳寿子と結婚。社長令嬢と職人という立場の違いから、当初は難色を示した奥野氏も、二人の固い決意の前にこれを承諾。恒夫は、仕事に、家庭に、より一層の情熱を傾けるようになった。

たったひとつ、果たせなかった夢

1 953（昭和28）年のある日、日ごろから懇意にしていた会社から、ある話が持ち込まれた。広島西美電気工業（現・テンパール工業）が、安全ブレーカーの樹脂部品を作ってくれる会社を探しているという内容だった。

当時、安全ブレーカーは、取り換えが面倒なヒューズが不要であることから大ヒット商品となっていた。奥野製作所は、技術はもちろん、どんな要望にも応える柔軟さや納期を厳守する点が見込まれ、その樹脂部品を請け負うことになった。

西美電気工業との取引が始まった頃、恒夫のもとに実家から電報が入った。そこには「チチキトク スグカエレ」の文字があった。恒夫は大阪からすぐさま岡山へ向かった。実家では、いつも達者だった父が意識を失って病床に伏していた。恒夫は枕元で、父に詫びたい気持ちになった。これまでも仕送りは精一杯してきたが、幼い頃に決意した「父親に楽をさせる」という夢をとうとう果たせなかったからだ。倒れてから1週間後、恒夫の実父・東荒吉は72歳で静かに息を引き取った。

父の死という悲しみをバネに、恒夫はさらに懸命に仕事に取り組んだ。そのおかげか、取引額は着実に増えていき、現状の設備では生産が追い付かなくなるほどになっていた。そこで、西美電気工業の資本参加を経て、1956（昭和31）年2月24日、奥野製作所を大和合成樹脂工業へと組織再編し、恒夫は取締役工場長に就任した。工場運営に精を出す一方で、恒夫は新しい合成樹脂に対して常に関心を払うようになった。夜遅くまで資料を漁り、早朝から実験を重ね、開発にも取り組んだ。1968（昭和43）年11月には、奥野氏が会長へ、そして恒夫が社長へと就任。その後も毎年3～5割の成長を続け、7年間で売上規模を10倍に伸ばした。



1951（昭和26）年頃の奥野製作所

大阪の街角に響く歓喜の雄叫び

あ る日の昼ごろ、梅田の歩道橋で人目もはばからず、「バンザーイ！バンザーイ！」と諸手を挙げて叫ぶ二人の男たちがいた。そのうち一人は、社長を継いで1年目の恒夫であった。親しくしていた経営者の友人とたまたま出会い、近況を報告していた時、「売り上げが1億を越えたよ」、「そうか、うちもだよ。お互い苦勞が報われたな」と何の気なしに言葉を交すうち、どちらともなく感極まって「バンザーイ！」と声を上げてしまった。一つの念願にしていた「年商1億円」を達成した喜びが、堰を切ったように体から溢れ出していた。先代から継いだ会社とはいえ、社長として全責任を背負いながら、苦しみつともやり遂げた初めての目標達成だった。

「これが喜ばずにいられるか！そうだ！巻き寿司を食べに行こう」。

すぐさま近くの寿司屋に飛び込んで、注文した巻き寿司を食べる恒夫の頬を大粒の涙がつついていた。

1988（昭和63）年、社長の座を長男の奥野拓司氏に譲るが、恒夫の仕事への志は企業文化として同社の中に根付き、以降の発展を支え続けた。1989（平成元）年には大和合成（株）へと社名を変更、現在は「プラスチックの可能性を提案するファーストコールカンパニー」を目指し、創業100周年に向けて全社一丸の弛まぬ歩みを続けている。



ホーチミン工場
（1995年設立）



ハノイ工場
（1997年設立）

世界に広がるダイワグループ

「プラスチックのことなら、まずダイワさんに相談しよう」と言ってもらえる『ファーストコールカンパニー』を目指し、常識にとらわれない提案力と技術力で、お客様に様々な価値を提供している。早期からベトナムへも進出し、試作から量産までの一貫体制を構築した。現在では東南アジア各国へも取引を広げている。